昭和63年3月25日

立教大学 社会福祉ニュース

第12号　昭和63年3月25日　編集発行人　早坂泰次郎　東京都豊島区西池袋3　立教大学社会福祉研究所

立教大学社会福祉研究所
創設20周年記念座談会

「福祉研のこれからとこれまで」

1987年12月19日（土）
立教大学社会福祉研究所にて

出席者	早坂泰次郎	（所長）
	梶原達観	（所員）
	西澤稔	（所員）
	足立叡	（所員）
	藤本昇	（所員）
	岩佐壽夫	（研究員）
企画・司会	山本恵一	（研究員）
記録・編集	小川憲治	（研究所助手）

⊙創設の精神“人間福祉とプラグマティズム”

山本　今年は，福祉研〔昭42年創設〕の創設20周年記念ということもありますし，早坂所長も本年度をもって停年退職となりますので，ある意味で区切のよい年です。そこで座談会を企画し，「福祉研のこれからとこれまで」というテーマで，所員の先生方にご自由に話していただくことにしました。僕は福祉研に来て約10年になりますが，20年の歴史の前半の10年間のことはあまり良くわかりません。そこでまず古くからいらした先生方のお話を伺いたいと思います。一番思い出深かった事印象深かったことなどお話しください。

西澤　20年前というと，岩井さん〔福祉研初代所長〕の頃だよね。僕がここへ初めて来たのは，昭和43年から44年なんですが，絶えず赤字っていうのかな。さっき僕が来るなり，事務局に「この前のセミナーの会計どうだった？」て聞いたのは，歴史を表わしているわけよね。

小川　なるほど。

西澤　この20年間，自分達の会費でやってきたわけじゃない。つい最近でしょ。学校側で予算をつけてくれるようになったのは。まず，その経済的な苦しさの歴史ということが，何をやるにしても身についているね。

早坂　一番最初，岩井さんが募金をしましたよね。主にＯＢから40万円ぐらい集めましたね。

西澤　来たばかりの頃は，岩井先生とよく2時間ぐらい議論しました。議論好きな方でしたからね。実習生をうちの施設でとった時に，実習指導にみえたのがご縁で，「福祉の現場のことを話してくれないか」と言われてここに出入りするようになったわけです。岩井先生はアメリカに長くいらしたんですよね。

早坂　いや，当時社会学部の福祉のコースを担当しろと言われてアメリカに福祉の勉強に行ったけど，それは1年だけ。前にチャペルの時代にはもっと長く居た。シカゴに居た人です。

西澤　どうしてもアメリカの社会福祉の話ばかりで，私の日本人による日本人のための福祉をという論理に対してアメリカでは，という事がありましたからね。でもおもしろいなと

思って。少しでも先生に近づくには見てこなきゃしょうがないと思って，スウェーデンなどヨーロッパの社会福祉を視察に行くきっかけになりました。1970年代の大学紛争の時代のことですね。その頃足立先生は現役だったのかな。

足立　そうですね。あの頃僕は大学院生でした。

山本　福祉研の創設当時の話が色々と出てきましたが，早坂先生に創設のいきさつやその当時の思い出などを話していただきましょう。

早坂　まだ私が文学部にいたころ，亡くなった岩井さんが「一緒に福祉コースを担当してくれないか」と声をかけてくれた。（当時彼は学生部長で私が副部長だった。）「イギリスのタヴィストック研究所がやっているような地域と密着した活動をやりたい。」と熱っぽく話して下さったのをはっきりと覚えている。

一番最初は，2号館の中の一研究室に社会福祉研究所の看板を出したんだ。それは，確か前の平井先生の部屋だったと思う。そのうちに大須賀総長が，この建物（校宅10号館）が空いていたんで，「大学で使いたいんだけど，福祉に使ってもらいたいんだ。」といわれそれで当研究所が生まれたということなんだ。その辺の事は，あんまり知られていないと思う。

山本　梶原先生は，設立当初からずっと所員でいらしたんですか？

梶原　ええそうですね。私がこちらに来てソーシャルワークを教えるようになって，その頃しきりに早坂先生と岩井先生とで，立教の福祉のためにがんばってらしたんですね。岩井先生が福祉研の存亡をかけて募金集めを始めたのもこの頃ですね。「靴を何足か，俺ははきつぶしたよ」という風に，相当歩きまわって集められていました。その点はもう本当に評価しなければと思いますね。

山本　実質的には，岩井先生と早坂先生がご一緒に福祉研を創られたという事ですね。

早坂　うん。そうそう。カリキュラム，科目なども色々話合ってね。アメリカの福祉教育では，人間の発達に関して赤ん坊から老人までをたどっていくコースがあったんだけど，まあそれと同じではないけど何か中心となるものが何かないか，ということで，例えば「実存心理学」の講座ができたんだ。

梶原　早坂先生は，岩井先生の亡くなった後で立教の福祉の特徴的なところというと，人間福祉ということを大事にされてきたんですよね。社会福祉という固定的な価値が，最初にドンとあるということではなく，はたしてどう人間福祉が実現できるかが問題であった。そういうことが実存的であるということで。

早坂　そう。岩井先生と僕はかなり違ったところもあったけれど，言ってきたことは大体プラグマティックだという事では一致していた。しかし岩井先生の方に集った人びとは，どちらかというと，福祉という，いわゆる福祉色の強い人達で成り立ってたね。

梶原　しかしそれも大学紛争の頃からですよ。

早坂　そうそう。

山本　足立先生は，思い出としては，どういう事がありますか。

足立　僕は，この福祉研の所員になったのは今勤務している大学に赴任した昭和47年なんですね。そこは社会福祉専門大学ですし，しかも社会福祉の専門教員として採用されたものですから，それこそ1年位は社会福祉の勉強を初歩からまたやらなきゃならない状況でした。特に学部での専攻は社会学だったものですから。そういう中で，早坂先生から「君も社会福祉の大学の教員になったんだから所員をやれ」ということで推薦されて，47年に所員となったわけで今年でちょうど15年目です。

その中で最初の思い出は，やはり48年頃の立教大学社会学科の福祉関係のカリキュラムの改定問題ですね。

早坂　ああ，あったあった。

足立　その頃は，岩井先生はもうお亡くなりになってしまったから，早坂先生が中心になって，社会学科の福祉関係のカリキュラムの改定という問題に取り組まれたんですね。それに対して学生諸君から異議を唱える動きが出てきたんですね。「早坂イズム一辺倒で，これでは福祉のオーソドックスな枠からはずれる」というのが当時の学生諸君の主張でした。その時，僕も非常勤で（47年から担当してましたんで），早坂先生，学部長，学科長と僕の4人で学生諸君と集会を開いたんです。

早坂　うん。何べんもやったね。

足立　そこで学生諸君が言ったのは「このカリキュラム（改定案）には，社会福祉の制度や政策についての内容がぬけており，臨床ばかりである。これではおかしい」ということでした。それに対し僕がその集会で学生諸君に言ったのは「日本の社会福祉の研究と教育というのは，これまでいわゆる制度論的な立場と，いわゆる臨床技術論的な立場があるがしかし立教の社会福祉は基本的に人間の福祉をめざす臨床を中心にした福祉できているんだ。

やはり立教の社会福祉教育の独自性というものも大切に育てていかなくては」という事です。学生諸君はそういう日本の社会福祉の研究・教育のあり方を全く知らない，無知なうえでそれを言っていた。そんなことが最初の頃で印象に残っていることですね。

西澤　ただ無知だったんだね。

足立　そうですね。それから個人的なこととしては，その頃自分がどうこの研究所にかかわるのか，という事がはっきりしないまま，学生，所員を含めての人間関係の中で悩んだ覚えがあるんですけども，それがまあ5年たって（ちょうどこの研究所が10周年を迎えた時ですね）『立教』という季刊誌に福祉研について何か書けという依頼がありました。その時僕が書いたのは，岩井先生と早坂先生が研究所を創られた時の原点と，岩井先生が亡くなられて早坂先生が引き継がれたのとが，基本的につながっている」ということです。これは先程，早坂先生から「岩井先生と僕は大分違うけれども基本的には同じような事だ」という話がありましたが，それは，ある意味ではプラグマティズムということでありこのプラグマティズムの1つの意味は，この研究所は色々な人が出入りする。つまり色々な人が出入りできる所である。そしてここの研究所はここで研究するというよりもそれぞれの方が現場の色々な実践の場で，現場の色々な活動について，ここへ集ってここでそれを理論化したり抽象化したりする。そしてまた現場へ帰ってゆく。そういう意味のプラグマティズムの場であるという事は，岩井先生から早坂先生への流れに至って基本的には同じものが流れていると思います。

早坂　それはね，比較にはならないけれども，岩井先生がタヴィストックみたいだと言ってたのは，そこなんだよ。それが生きている訳よね。

足立　それは今でも生きていると思います。僕はその様な気持で10年程前からここへ参加させていただいているわけです。

早坂　僕はね，副所長も5年位やりましたね。

西澤　そうですね。

早坂　岩井さんの亡くなる5年位前だね。副所長になったのは。あっそれ〔季刊紙『立教』〕持ってるの？

足立　ええ，持って来たんですよ。「社会福祉研究所のこと」って書いて原稿料2千円もらいましたよ。（笑）

早坂　今だにそんなもんだよ。（笑）

足立　あっそうですか。（笑）この記事の中に岩井先生の「われわれの研究所は所謂研究所ではなく，一つの運動体であります。各々フィールドをもち，実践の場に身をおきつつ，その経験を研究グループにもち帰り，自からの手で抽象化の営みを試み，更にそれを実践の場にもちかえるということを試みています。従ってここでは綺麗ごとは通用しない。又一見ばらばらに動いているようであるが，問題意識と接近とに共通地盤を見い出しつつ相互啓発を模索しています」ということばを引用させていただいております。そして，その後にですね，今度は現在の所長の早坂先生の言葉「私にとって社会福祉研究所とは人間の幸福をもとめて集まって来る人々が，日常的な営みの一つとして研究するところという意味をもつ場所である」ということばを引用しております。まあ表現はちょっと違いますけどね，つまりそういう場であり，そういう場として大事にしていくということは非常に一貫している，と僕はここに書いています。

早坂　大分，はっきりしたね。

山本　はっきりしていますね。

足立　これは10年前，10周年の頃です。

早坂　忘れていたよ。そんな事あったかな。

⊙　研究所の特色と独自性

山本　西沢先生は，岩井先生から早坂先生へ移られるところを見てらして如何でしたか？

西澤　僕はね，立教のことは実習生を通じてか知りませんでしたが，ここへ勉強に来るということは，今足立先生が読まれたとおりでしたね。気持としてはね。とにかく触発されるものがありました。いろんな人達が出入りする場所だから。当面，同じ業界の人ばかりの研究所，（たとえば児童福祉とか）というのはあったんですよね。研究会にしても何にしても。そのような形で，そればかりじゃ，どうしても飽きたらなかったということもあるし，とにかく楽しかったですね。

早坂　岩井さんと初めてカリキュラムをつくったとき，「学部レベルではあまり専門化することはない。要するに学部レベルではできるだけ基礎を広くというか，専門化というのは大学院に入ってからでいいんだ」と彼は言ったし，僕もそうだと思った。そんな事があったのを覚えているな。そのことは彼が言った後に，僕もそういう風に感じてたから，カリキュラムの改正をやった。もちろん彼とは違

った部分もあるから，違った形も出て来たと思うけれど，基本的にはそういうのがあったと思う。だからいわゆる福祉の講義をみてる連中は「おかしいなあ」という風になったんだね。他ではどこでもあるようなものが無かったり，他に無いのがあったりね。

山本　研究所としてみれば，それは人間福祉のカリキュラムの具体化だったわけですね。

早坂　そうそう。研究所っていうんだけど，カリキュラムなどにも実際にかかわってきているわけだからね。本来，それは研究所がやるべきことかどうかはわからないけど。

梶原　福祉研の歴史を通じて二人の人を挙げるとすれば，岩井さんが福祉研の創始者として努力をしたいという事が一つありますが，それから福祉研究所がカリキュラム問題をはじめ解体の危機に瀕した時，早坂先生が投げ出さずに維持してくれた事ですね。その事は本当に私は大きいと思いますね。

それから研究テーマに関しては，日本の社会福祉の中で，ケースワークや家族の問題を先取りして取り組んだのは，やはりこの研究所だけだったと思います。

足立　それからこの研究所のもう一つの特色として，ここには社会学部の社会福祉専攻の学生のみならず，いろんな学部のいろんな事をやっている学生が，伝えきいてはここへ早坂先生や岩井先生など所員の先生方に会いたいといって来て，色々話をして新しい発見をしたりしていることがありますね。福祉以外の専門の事を勉強した学生が，そういう形でここでいう福祉に関心を持って卒業していく。そういう意味での普遍的な機能はかなりなされていたような感じがしますね。

早坂　それは今でもあるよね。

足立　そうですね。それは今でもそうですね。

西澤　そうですね，授業にはどの学科からも来ていますね。理学部からもね。それはめずらしいなと思った。

山本　ところで，比較的最近になって藤本先生がいらした頃から，公開セミナーなどのいろいろな活動が活発になったと思うのですが。その頃の思い出ですとかお話しください。

藤本　ええ。早いものですが，もう10年お世話になって，公開セミナーをはじめ沢山学ばせていただきました。毎日感謝しているところなんです。人間福祉というお話がありましたが，私もソーシャルワークは人間福祉だと思うのです。それから早坂先生がお訳しになっている〔ヴァン・デン・ベルクの〕「人間ひとりひとり」という本に非常に感銘しました。ソーシャルワーク（ケースワーク）を勉強している者の一人として，力強いものを与えていただけました。それからソーシャルワークの文献，特に1940年代・50年代の論文を見ますと“どう考えるか”でなく，“どう感じるか”という事が随分論じられているんです。そういう“感じる”という大事な事をこの福祉研で学んだんです。それからこれは非常に大きい事なんですけど，人間ひとりひとりを大切にすることの大切さを実感すると共に，人と関わることの楽しさというのをすごく感じるんです。それはグループ（体験学習）に出てからです。僕は公開セミナーで勉強させていただいて，特に今から約5年か6年前にＩＰＲトレーニング，これは人と人とのほんとうの関係，関わりということを体験できましたね。僕はこれじゃないかと思いました。これに参加させていただいて，本当のソーシャルワークというのは対人関係から出発するんじゃないか，それを強く感じています。

10年ちょっと前ですけど，まだ政策論，制度論（今でもそうですけど）が非常に多くて実は私は“感ずる”とかケースワークとか家庭の福祉とか言ったもんで，いわゆる“社会福祉の研究会”へ行ってもつまはじきだったんですよ。“何を今さら”と言うわけなんです。そんな時に早坂先生に初めてお会いして先生から「どういう勉強しているんですか」と聞かれて，当時，おねしょの子をひとりひとり臨床をふまえて研究していると恐る恐る申し上げましたら，先生が一言「大事な勉強ですね」と言ってくださったんですね。私，帰りに飛びはねて帰った事を憶えているんです。そんな意味から，福祉研というのは，私にとって自分を生れ変わらせていただいた所なんですよね。本当に感謝しています。

足立　藤本先生のおっしゃった，10年間所員としてやってこられた感想は，私も同感なんですけど，僕なりに考えてみると，これも早坂先生がよく言われるんですけれども，この福祉研の他にない一つの視点というのはやっぱり“臨床”ということですね。臨床という事をどう問題にしているかという所にこの研究所の他にない1つの独自性があると思います。先程藤本先生がおっしゃった，ケースワークとか家族の福祉とかは相手にされなかったこともそうですが社会福祉を制度論・政策論という事で問題にする人達だけでなくて，いわゆる技術論と言いますかね，ケースワークや

グループワークの研究者といわれる人達にもむしろ以降問題を感じることが多くなりましたね。臨床という事を，臨床技術としてとらえてしまう。そちらの方の問題の方が大きいのではないか，という感じすらむしろ持つんですよ。それで僕が大学を47年に出た時に，今の大学で社会福祉の専門の担当教員をしろという事で，ケースワークの講義をもたされたわけですが，ケースワークなんて僕は正直いって今まで読んだ事もなかったんですよね。しかしその時僕は基本的にはそんなに不安を覚えずに済んだんですよね。確かにケースワークの技術としての云々については無知だったけれども，あまり不安を感じずに今の仕事に入っていけたということは，僕はこの福祉研で言う“臨床”という概念に支えられていたし，今でも支えられているからだと思っています。ですからこの福祉研の一つの独自性は，単なる臨床技術，単なる場としての臨床というよりも，本当に人間と関わるというところでの臨床ということにあると思うし，事実そのことを大事にしてきたし，その事が大きな一つの体験ではないかと思いますね。

藤本　今足立先生のお話を伺ってて何かすっきりしました。こういうことを大事にして……。

足立　この事は，一つの証明として，岩井先生自身が福祉研ニュースの第1号で，所長の言葉として書かれていますね。「臨床というのは本当は中世ヨーロッパにおいて死に臨んでいる病者に対して共にいることだ」と。それが実際に研究所の教育の中で早坂先生に受け継がれて，我々に共有の一つの視点として今に至っているという感じを僕は持っていますけれどね。

藤本　今日，社会福祉の法案などが国会で議決されて，何やっていいか本当の所が分からないんじゃないかと思うんですね。中にはこの福祉研のやっている事に似たものとして“対人サービス”なんていう言葉があるんですね。

西澤　それは先に足立先生が言った様に，技術の理論なんだよね。

足立　そうですね。

西澤　まさしくその通りだと思うのね。そこが違うんじゃないかなあって気がするね。

藤本　何かもっと関わることを大事にする必要があるのでは……。

山本　まあ，そこら辺がこの研究所の特色とこれからの課題という事なんですけど。ところで，岩佐先生は福祉研に新しくいらして，この研究所をどのように見ていらっしゃるでしょうか。

岩佐　西沢先生に紹介していただいて，関わらせていただくようになった時は，全く白紙の状態でした。どういうメンバーがいらして，早坂先生がどういう立場をとりながらこの研究所を運営されているのかという事は正に，おっかなびっくりで入れさせていただいたというのが本音なんですね。今まで関っていた公務員という立場から飛び出したときに，やはりどこかに所属していたいというような気持があって入れさせていただいたのがスタートだったと思います。これまで私がかかわってきた母校などの研究所は，非常に堅いし，ある理論だった話で，極端な事を言えばお祈りからはじまるみたいな所がありましてね。そんなわけで，はじめて研究所に伺った時には，いきなりお酒が出て，（夕方でしたけど）“これは何だ”という“こういう研究所ってあるのか”という感じでした。意識の中では全く混沌としてしまいましてね。しかし，最近やっと整理がついてきました。なじんできたと言うか，同化されてしまったと言うか…。これはもしかしたら立教という大学のカラーなのか。それとも先程からありました様に岩井先生，早坂先生のカラーなのか，集まっている所員の問題なのか……。でも今これまでお聞きして，初めてスタートの精神がそうであったということで納得したというのが感想です。西沢先生あたりが長く関っていらっしゃるのだから，だいたいそうなんだなあとは思いましたが……。やっと2年目を迎えて，指示されてとか，いやいやながらやるとか，自分の業績のためにするとかというんじゃなくて，やりたくてやってゆくんだという，主体的に研究してゆけるような所にはじめて出会わせていただいたという思いが大変強いです。それからもう一つは，私は臨床というか実務だけをずっとやって来た立場で，この研究所で，その実務がもう一度ケアーされてフィードバックさせてもらえる，あるいは逆の関わり合いもここではしていけるだろう。そういう意味では非常に自分の中で期待感をもって関っていけるだろうと思っています。

山本　事務局としましては，毎回毎回所員会の時には，いろいろ準備もありますけど，やっぱり，所員の先生方の精神衛生に貢献できるよう，念頭においているんですよね。（笑）

小川　2年前に事務局をやらせていただくようになった時，初めての所員会でお茶を出したら，“アルコールは”と言われたのが，印象

に残っていますね。

早坂　立教の中でもここだけだよね。

西澤　岩井さんの時代には酒は出ていなかったですね。終ってからね。（笑）

⊙　福祉研の今後の課題

梶原　ところで，先程話に出ました社会福祉の制度・政策論と当研究所のかかわりの問題ですが。別に制度論が悪いわけでもなく，あるいは技術論が悪いわけでもなく，ともかく社会福祉の制度というものや厚生というものが本当に実際に頼る価値があるものであるかどうか。そういう意味で実践的フィードバックをするという事は大変大事なことですね。また，当然そういうものだから，一般的な福祉というのは評価されなきゃならないですね。例えば老人ホームなんかで，ホームを沢山つくってお年寄りを入れる事は良いことであると最初からきちんとしておかなければならない。だから老人ホームでは老人を収容しますけど老人福祉は無視して収容しているということもあり得ますよね。しかし，それでは，どの辺で老人の意志を確認するかが大事ですね。

藤本　先程ちょっと言葉が足りなかったんですけど，当時は“モノ”，“入れモノ”といった，そこばっかり見ていたんですね。でも人間なんですね。人間と関わってそこから出発しなければおかしいんじゃないか。という事を絶えず考えていて，ただ子供なりお年寄りなりを（その頃は子供の方が問題が多かったですけど）器をつくってそこにはりつけていけば福祉は事足りるというような考え方が…。

早坂　あの頃は時代的にもそういう時代でもあったよね。全体がね。

藤本　それは，本当にその人達は幸せになっていないという事を感じているわけです。おかしいじゃないか，いつも疑問に思っているわけです。

梶原　在宅福祉と言ったって，在宅福祉そのものが，モノ的な発想であるから，在宅福祉そのものが果たして人間福祉として成り立つのかどうかという意味では疑問ですね。

早坂　だからね。要するに，“福祉とは何か”という事を問いかえして，いつもやっていかなければならないんだよ。いわゆる“社会福祉”と言っちゃうと，そこは通らずに，でき上った制度から，あるいは制度づくりから始まっちゃうから。だから社会福祉より人間福祉という言葉をそういう意味で使ったんだけれど，まずそういう言葉をきちんと使った方がいいかもしれないね。社会福祉ということでイメージができちゃっているからね。

梶原　要するに実存的な考え方というのは福祉には出ていないですね。

早坂　日本の場合学問としては，経済学，政治学出身の連中がはじめたからね。

梶原　社会政策論としてね。

足立　そういう意味でこれまでの社会福祉論は一般的ですよね。社会福祉を問いなおす社会福祉学にはとり組んで来ていないですね。どこまでも福祉というものを一つの前提とした中で，人々をある領域の対象としてとらえていく，そしていろいろ分析・説明していくという論はいっぱいある。むしろ福祉とは何かという事を臨床的に問うことが大事ですね。

早坂　たとえば，立教のカリキュラムの中に社会福祉実習というのがあるけど，社会福祉実習学というものがあるはずだし，それが無ければおかしくなる。つまり“実習をやっていく”そこが学問やっていく場所なんだという発想だね。この福祉研というのははっきりと意識していないけど感覚的にずっとそういうものを追いかけて来た。そういう意味で“臨床”なんだよね。

梶原　現場の方が所員会を構成しているという社会福祉研究所というのは，どこでもそうですか。

早坂　いやあまりないんじゃないですか。

足立　それは立教の福祉研の一つの特色ですね。

早坂　今度，例の社会福祉士問題が出てきたことで，またかなりの議論が必要だね。だいたい立教で資格を取れるようにするのかということだね。あの資格自体がどうかと言うとね，今まで僕らがここでやってきたものとかなり違った方向になるんじゃないでしょうかね。そういう意味で，ちょっと大変な時期でしょうね。むしろあっちの方が社会福祉なんだとなれば，この社会福祉研究所のあり方自体が“おかしいんだ”という事にならざるを得ない。

山本　そこら辺がこれからの課題，問題ですよね。現実には福祉希望の学生というのは多いわけですから。

足立　そういう意味では資格問題など現実的な対応もこれからしていかなければ……。

西澤　将来に向けての問題は皆わかっているわけでしょ。だから〔現在研究休暇で米国に行かれている〕佐藤先生（副所長（次期所長））

が帰ってこられてからだね。

山本　佐藤先生も，いつだったか，やっぱり岩井先生，早坂先生とこれまでずっとやってこられた創設の精神を，何とかして継いでいこうという所で色々苦労しているという事を自身でおっしゃっていたから，だからこそこれから大変になっていくんではないかと……。

足立　引き継いで行こうとすればする程ね。

早坂　ただ最後に一言だけ言うとね。もし仮に立教が，新しい法律の内容をやると決めて，そっちに歩き出すとすると，確かにこれまでの研究所と違ってくるけれども，僕はそれはそれでいいと思っている。今まで研究所とカリキュラムというか学部とがはっきりしていなかった所にむしろ問題があったわけだからそこがはっきり違ってくれば，違ったなりの対応のしかたがあると思うんだ。そういう点僕はこだわらないんで，問題がどうなっちゃうかという方が先ですね。

山本　とにかくやるしかないという感じですね。皆さん，どうもありがとうございました。

1987年度紀要「立教社会福祉研究」第9号掲載内容一覧

（創設20周年記念・早坂泰次郎所長退任記念特集号）

〔記念論文〕

- PHENOMENOLOGY OF THE GROUP　早坂泰次郎
- 早坂泰次郎教授（所長）業績目録

〔論文〕

- 超高齢社会の老人ケア　岡田玲一郎
- 方法論からの社会福祉　足立　叡
- 自助グループへの（臨床）知的＝人間性中心の接近方法　山本　祐策
- いわゆる登校拒否に関する諸問題の再検討　高橋　良臣
- Acceptance と Confirmation ―その2―　山本恵一
- ロールシャッハテストの方法論に関する一考察　滝沢　広忠
- 人間関係の病理としてのテクノストレス（その1）　小川　憲治

〔資料〕わが国の少女非行についての史的考察のために(9)　西澤　稔

〔翻訳〕ケースワークの科学的発展（ヘレン・ロス，A.M.ジョンソン著）　藤本　昇(訳)

昭和62年度社会福祉関係修士論文・卒業論文題目一覧

社会学研究科修士論文

精神分析療法におけるターミノロジーの臨床的吟味　岡本（山中）　和子

人間関係の病理としてのテクノストレス ― コンピュータ労働者の疎外感の理解と人間性の回復をめざして　小川　憲治

社会学部社会学科卒業論文

フランクルに於ける強制収容所囚人の心理と現代的意義　青木　真一

“今を生きる”人間関係を通して　石井亜右子

現代における人間観の歪み　石井　真理

思春期の母－娘関係における娘の役割について　猪俣　静代

「母親になる」ということ ― その現象学的考察　岩本　操

Death and Dying ― 現代日本人の死生観　遠藤真紀子

余暇の病理　大塚　潤一

青年期危機と家族関係 ― 青年期の症例をめぐっての考察　大野由美子

関係から生じる自己　倉繁　祐代

中年期主婦におけるアイデンティティの危機　小林　洋子

単身赴任 ― 家族関係及び家族成員に及ぼす影響についての考察　鈴木真理子

言語の事実性　高田　邦宏

ある自閉症児の記録から ― その存在理解のために　林　まゆみ

生きること死ぬこと ― ターミナルから見えてくる生の質を考える　半場　紀子

からだが語る ― 実存を見い出す為に　藤井　由美

対人関係における言葉 ― 現象学的立場から　藤崎千恵子

人間存在の基盤としての宗教　八木　正信

変化を生きる ― コミュニケーションとしての関係から　矢野　優子

現代家族における親子関係について ― 役割理論による考察　山口　康人

精神的危機を示した思春期の子どもと家族のダイナミックス ― 登校拒否の場合について　山崎ひろみ

人間関係における相互信頼 ― ほんとうの人間関係を築いていくために　山田　容子

人にとってのコンピュータの意味を現象学的に捉えてみる ― 機械の手網を再び手中に　牧原　利明

立教大学社会福祉ニュース12号目次

- 研究所創設20周年記念座談会「福祉研のこれからとこれまで」 …… 1
- 1987年度紀要「立教社会福祉研究」第9号掲載内容一覧 …… 7
- 昭和62年度社会福祉関係修士論文・卒業論文題目一覧 …… 7
- 研究所スタッフ一覧（1988年3月現在）…… 8

＜研究所スタッフ一覧＞

（1988年3月現在）

所　長	早坂泰次郎	立教大学社会学部教授
副所長	佐藤　悦子	立教大学社会学部教授
所　員	足立　叡	淑徳大学社会福祉学科助教授
	池田　秀夫	
	江口　篤寿	立教学院診療所医師
	岡田玲一郎	社会医療研究所所長
	小滝美智子	竹中工務店カウンセリングルーム・カウンセラー
	梶原　達観	田宮病院心理・ソーシャルワーカー室スーパーバイザー
	坂口　順治	立教大学文学部教授
	櫻井　芳郎	国立精神・神経センター精神保健研究所精神薄弱部長
	高橋　良臣	登校拒否文化医学研究所代表
	田中　一彦	淑徳大学社会福祉学科助教授
	田宮　崇	田宮病院院長
	西澤　稔	福音の家　施設長
	長谷川　浩	東京女子医大看護短期大学教授
	平木　典子	立教大学学生相談所カウンセラー
	藤本　昇	文京女子短期大学教授
	山本　祐策	八代学院大学助教授
研究員	岩佐　壽夫	家庭ケースワーク研究所主宰
	山本　恵一	立教大学社会学部助手
研究所助手	小川　憲治	立教大学大学院在学
福施実習担当	嶋田知香子	立教大学大学院在学

〈編集後記〉

時のたつのは早いもので，昨年度，本ニュース第11号の復刊を果たし，ほっとしたのも束の間，本号の発刊の時季を迎えてしまった。

今回は，当研究所創設20周年を記念して企画された座談会の特集記事を中心に皆様にお届けすることになった。座談会を通じて，当研究所の創設の精神，特色，独自性，今後の課題などをご理解いただければ幸いである。

また，本年度の紀要「立教社会福祉研究」第9号も，創設20周年ならびに，15年もの長きにわたり所長を務めてこられた早坂泰次郎教授への感謝をこめて，同教授退任記念特集号として発刊することになった。本紙とあわせてご一読をおすすめしたい。

来年度からは，新所長の下で，当研究所も21世紀にむけて新たなる一歩を踏み出すことになった。本ニュースも，内容の充実と刷新をはかり，研究所の歴史とともに歩み続けてゆきたいものである。　（小川）

立教大学社会福祉ニュース　第12号

昭和63年3月20日印刷
昭和63年3月25日発行

編集兼発行者　早坂泰次郎
印刷所　株式会社絢文社
発行所　立教大学社会福祉研究所
東京都豊島区西池袋3丁目
電話　03(985)2663